



インターネットの爆発的な普及により、本の存在意義が危ぶまれる、とよく言われる。わざわざ紙の本を手にとらなくても、ウェブ上の記事や電子書籍で様々な情報を手に入れるようになったからだ。

そんな情報社会を生きるわたしたちだが、完全に紙の本と関わらない生活をしている人は案外少ないのではないだろうか。家には本棚があり、お気に入りの本が並ぶ。毎年恒例の文学賞はニユースに取り上げられベストセラーに。好きな本が出版されれば手に入るまで書店を巡り、流行りの漫画を貸し借りすることもある

だろう。内容は違っても、誰しも思い出深い一冊があり、何かしらの影響を受けてきたことだろう。

ではここで改めて、「本」とは何かについて考えてみよう。

本は一言でいえば「道具」だ。物体としての本は紙の束を片側で綴じてまとめたシンプルな作りをしている。表面が基本的に平らで、積み上げることもできる。また、凝った装丁の本はそれ自体に価値が生まれ、世界中にコレクターがいる。

しかし、それが本という道具の本質とは言い難い。本とは、載っている文章や写真、絵を「読む」「見る」

ものであり、社会的な情報伝達の手段の一つだからだ。

そんな「本」が他の道具と一線を画すのは、あらゆるメタファー（隠喩）を生み出した点にある。アルゼンチンの大文豪ホルヘ・ルイス・ボルヘスは、人間が創り出した最も驚異的な道具として書物を挙げ、こう述べている。

「(書物以外の) 道具はいずれも人間の体の一部が拡大延長されたものでしかありません。(中略) しかし、書物は記憶と想像力が拡大延長されたものだという意味で、性格を異にしています」(※注1)

つまり、本は物体であると同時に、人間の精神であり、知覚でもある、特殊な道具だと指摘しているのだ。

本を読むことは一人の「人間」や「人生」に触れることと同じだとする考えや、我々が同じ本を通して、本が提供する夢を「共有」できるという見方もある。こうしたメタファーは、本と人間が強固に結びついているからこそ生まれるものだ。



さて、この記事を読んでいるあなたにとって、本とは「何」だろうか。「愉しみ」、「財産」、それとも「自身
自身の鏡」？ その答えは十人十色
人の数だけ存在するだろう。
「本」は人間の文化の象徴、記憶や
アイデンティティの塊であり、「手
で触れられる精神のかたち」（※注
2）だ。本が持つ言葉の力は、長き
にわたり我々に様々な気づきを与え、
新しい考え方へ導いてきた。

しかし、私たち市民が様々な本に
親しめるようになったのはつい200
300年前のことである。それ以前、読
書は限られたごく一部の人が嗜むも
のだった。

では、どのようにして読書は大衆
へ広まっていったのか。人々が本に
親しむまでの歴史を見ていこう。

読書の歴史

古代、人類が石版や動物の骨に文
字や絵を刻んだその時から、本の歴
史は幕を上げた。その後、石から紙
へと何千年以上もの時間をかけて変
化し、1455年、ヨハネス・グー
テンベルクが発明した活版印刷術に
よる印刷本が登場した【図1】。

常に消極的だ。むしろ、思想を伝達
する本が「有害」だとみなされた場
合は、厳しい弾圧が行われることと
なり、これは歴史上幾度となく繰り
返されてきた。

本の破壊と人間

本の歴史は、禁止と抑圧、受難の
歴史であると言っても過言ではない。
権力者たちは政治上の都合で邪道、
もしくは不当とされた書物を禁圧す
ることで、世の秩序を保持できると
考えたのである。

あるいは、戦争において敵側の文
化を滅し、民族的なアイデンティ
ティ、情報を得る権利等を奪い屈服
させるという意味でも、本の抑圧、
破壊は非常に有効な手段だ。冒頭で
述べたように、書物は単なる物体で
はない。本は人々の記憶や文化の伝
達という役割を担う。それが破壊さ
れると言うことは、歴史を後世に伝
える手段を失い、個人や共同体のアイ
デンティティ、人としての尊厳が
破壊されるに等しい。

中国・秦王朝の「焚書坑儒」【図
4】や、ルネサンス期のフィレンツェ
における「虚栄の焼却」、そして第



【図1】グーテンベルクが制作した聖書の1ページ。装飾部分以外の文字をヨーロッパで初めて可動式活字で印字した。

それから50年も経たず、1501
年にヴェネツィアのアルドウス・マ
ヌティウスという人物によって、今
日見るようなポータブルな小型本が
製作された。それ以前の本はかなり
大型で、グーテンベルク聖書も含め
凝った装飾画を手描きしていたた
め、完成に大変な労力と時間、費用
がかかる高級品だった。そのため迅
速な本の普及と実用性を目指したマ
ヌティウスの小型本は、より多くの
人々に本が親しまれる契機となった。
その後18世紀後半の西欧世界で
は、いわゆる「読書革命」が起こっ
た。印刷技術の進歩に伴い本の価格
が下がり、教育による人々の識字率
が上昇したこともあって、娯楽とし

二次世界大戦時のナチス政権による
「^{ビブリオ}書物大虐殺」――本の破壊は世界
中で無数の事例がある。現代におい
ても、多くの本が焼却あるいは爆撃
の対象とされ犠牲になっている。本
以外のツールで知や文化の蓄積が可
能になった現在でも、未だに本は人
間にとって精神の写し鏡たる存在で
あることに変わりない。それを攻撃
することは、人々の心にダメージを
与えらえる効果的な手段なのである。



【図4】中国の焚書坑儒を描いたもの。秦の始皇帝によって紀元前213年には書物が、翌年には儒学者たちが多く犠牲になった。

こうした悲劇は、実は私たちのす
ぐそばに潜んでいる。いつ何時、自
分が加害者・被害者側になるとも限
らない。本の破壊者たちは、共通し

ての読書が市民レベルに広まったの
だ。かつては宗教書などジャンルも
限られたものだったが、エンターテ
インメント要素を備えた小説、市民
の生活に根付いたレシピ本やガイド
ブックなどの実用書が登場した。図
書・新聞・雑誌など、様々な形態の
書物が出版されたことも、購買層を
広げたことに一役買った【図2】。



【図2】イギリスの新聞『タイムズ』。1788年12月4日付。

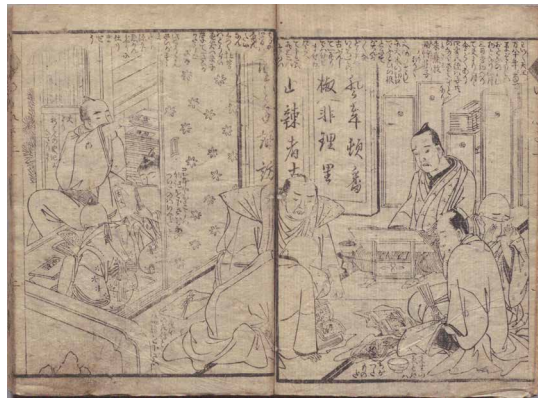
一方日本の出版産業は、江戸時代
に武士階級から庶民へと裾野が広が
り、出版する本の種類・量と共に読
者数が大幅に増えた。大きな要因と
しては西欧と同じく教育（寺子屋）
による識字率の上昇と、貸本屋の存
在が挙げられる。貸本屋とはその名
の通り、見料（購読料）をとって書
物を貸す本屋のことだ。当時大衆向

た態度を示している。それは世の中
の人間を「私たち（仲間）」と「彼
ら（他者）」の二つに区別する傾向
である。これがエスカレートすると、
「私たち」以外は全員敵と見なすよ
うになり、「彼ら」を攻撃し始める。

インターネット社会が拡大し、簡
単に世界中と繋がることから出来る今、
様々な考えや文化、風習に触れる機
会も増えた。多様性を意味するダイ
バーシティという言葉が広まり、互
いの違いを理解し受け入れることが、
社会生活をより円滑にするという認
識も生まれている。そんな中、未だ
無意識のうちに「私たち」と「彼ら」
という二つの世界に分断して物事を
判断してしまうことはないだろうか。
私たちは二分化された世界で敵を作
るのではなく、柔軟で広い視野を持
つべきだ。そんな時に私たちを助け、
導いてくれるのもまた「本」なので
ある。

様々な内容、分野の本を読み、あ
らゆる考えや文化を学び認めること
は、必ず人生の糧になるだろう。自
分なりに読書を楽しみつつ、本の存
在意義、そしてそれが破壊される悲
しみについて考えてもらえれば――
人々が分かり合える未来に一步近づ
けるかもしれない。

けの娯楽本を多く取り揃えた貸本屋
【図3】は大流行し、1808（文
化5）年の記録では、江戸だけで650
軒あったという。



【図3】竹枝為軒／作『^{それらのいらい}従夫以来記』（1784（天明4）年）に登場する貸本屋。世代に関係なく様々な人が利用していた。

一部の人だけのものだった読書が、
様々な印刷媒体を通して市民の日常
に浸透した結果、本はより一層思想
や情報を共有するツールとして、そ
の能力を遺憾なく発揮するようにな
る。

しかし、個人の思想が生まれる環
境が整うことに対し、権力者たちは

参考文献

- ※『国説本の歴史』
樺山紘一／編、河出書房新社、
2011年 所蔵：中央
- ※『本』
竹尾／編、平凡社 2011年
所蔵：中央
- ※『読書と読者』
キヤサリン・シールドリック・ロス（ほか）／著、
川崎佳代子（ほか）／訳、
京都大学図書情報学研究會、2009年
所蔵：中央
- ※『世界を変えた100の本の歴史図鑑』
□デリック・ケイヴ（ほか）／著、
大山晶／訳、樺山紘一／日本語版監修、
原書房、2015年 所蔵：中央
- ※『本の歴史文化図鑑』
マーティン・ライアンズ／著、
蔵持不三也／監訳 三芳康義／訳、
終風舎、2012年 所蔵：中央
- ※『身体としての書物』
今福龍太／著、東京外国語大学出版、
2009年 所蔵：中央
- ※『ベリック司書講座・図書館の基礎と展望10
図書・図書館史』
二村健／シリーズ監修、学文社、
2014年 所蔵：中央
- ※『江戸時代の図書館流通』
長友千代治／著、仏教大学通信教育部、
2002年 所蔵：中央
- ※『書物の破壊の世界史』
フェルナンド・パエス／著、
八重樫克彦（ほか）／訳、紀伊國屋書店、
2019年 所蔵：中央・上高田・美鳩・
中野第一・みなみのみ
- （※注1）
『語るボルヘス』
J・L・ボルヘス／著 木村繁一／訳、岩波書店、
2017年、11頁より引用 所蔵：江古田
（※注2）
『本』
竹尾／編、平凡社、2011年、23頁より引用
所蔵：中央

【図3】国立国会図書館デジタルコレクションより引用
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/892490>